

社会技術研究開発事業
令和6年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「ケアの葛藤によりそい、ケアラーの社会的孤立・孤独を
予防する包括的支援システムの構築」

斎藤 真緒
立命館大学 産業社会学部 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	3
2-3. ロジックモデル	4
2-4. 実施内容・結果	5
2-5. 会議等の活動	24
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	25
4. 研究開発実施体制	25
5. 研究開発実施者	27
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	29
6-1. シンポジウム等	29
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	29
6-3. 論文発表	29
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	30
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	30
6-6. 知財出願	32

1. 研究開発プロジェクト名

ケアの葛藤によりそい、ケアラーの社会的孤立・孤独を予防する包括的支援システムの構築

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

本プロジェクトでは、ケアラーの「葛藤」に注目する。家族主義的福祉政策を基軸とする東アジア地域では、ケアラー支援が福祉政策の中に十分定位されておらず、このことはジェンダー不平等と深く関連している。ケアラーの葛藤は、ケアはくするーしない>という単純な二分法では解決せず、ケアが継続する限り、ケアとの距離を調整し続けなければならないことを踏まえたケアラー支援を構想する必要があることを踏まえ、本プロジェクトでは、以下の四つの事業を実施する。

第一に、ケアラーの社会的孤立・孤独リスク評価手法の開発として、ケアラー自身が、ケアと自分自身のライフチャンスを両方視野に入れながらケアとの距離を継続的にデザインできる指標開発を行う（ニーズ発見シート、ライフチャンス・チャートシート、かかわり指標の改良）。

第二に、ケアラーの社会的孤立・孤独の予防施策開発として、ケアラーの多様なニーズを、ケアとの距離という観点から、<ニーズ発見><葛藤支援><ケアからの距離化><ケアと両立した自己実現(エンパワメント)>という4つの領域を設定し、多様なケアラー支援を包括的にとらえる枠組みー<スペクトラム型支援提供システム>を開発する。この枠組みに基づき、既存のケアラー支援団体を相互連携させ、ケアラーへのシームレスな支援を可視化させる<ケア・エンパワメントプラットフォーム>を構築する。

第三に、ケアラー支援の具体的な社会資源として、早期発見のための「ユースクリニック」「デジタル保健室」の実装、「ショートステイ事業」拡充、「親子プログラム」開発に注目し、ケアラー支援という観点からのプログラムの開発を行い、ケアラーの葛藤支援という観点からの効果を検証する。

第四に、ケアラー支援にかかわる一連の社会实践とその効果検証を福祉国家論・福祉レジーム論という観点から整理し、東アジア地域におけるケアラー支援の定位のための課題と方向性を理論的に指し示す。

全事業を通じて本プロジェクトは、ケアラーの葛藤に寄り添う仕組みを開発することで、ケアの負担軽減という<狭義のケアラー支援>だけではなく、ケアの社会的価値が尊重される<広義のケアラー支援>としてのケアリング・ソサイエティの構築に貢献するものである。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

Q1. メインクエスチョン① 社会的孤立・孤独のメカニズム理解

日本におけるケアラーの社会的孤立・孤独の特徴は何か？

Q2. メインクエスチョン② 社会的孤立・孤独を生まない社会像の抽出

ケアの社会的価値が根付く”ケアリング・ソサイエティ”の実現において、ケアラー支援はどのような意味をもつのか？

Q3. メインクエスチョン③ 社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み

ケアラーの生活・人生においてライフチャンスの実現はいかにして可能か？

Q4. サブクエスチョン (理論構築チーム)

家族主義が根強い東アジア地域において、ケアラー支援の障壁はどのようなものか？ケアラー支援がどのようにして可能になるか？

Q5. サブクエスチョン (指標開発チーム)

ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクはどのように可視化し評価することができるか？

Q6. サブクエスチョン (指標開発チーム)

ケアラーが自らのライフチャンスを意識化するためには、どのようなツールが有効か？

Q7. サブクエスチョン (ニーズ発見チーム)

ヤングケアラーの早期把握の場所として、対面での活動（こども食堂およびユースクリニック）はどのような効果があるのか？

Q8. サブクエスチョン (ニーズ発見チーム)

ヤングケアラーの早期把握の場所として、非対面の居場所と活動（デジタル保健室）はどのような効果があるのか？

Q9. サブクエスチョン (距離化・葛藤支援チーム)

ケアラーはどのような葛藤を抱えているのか？

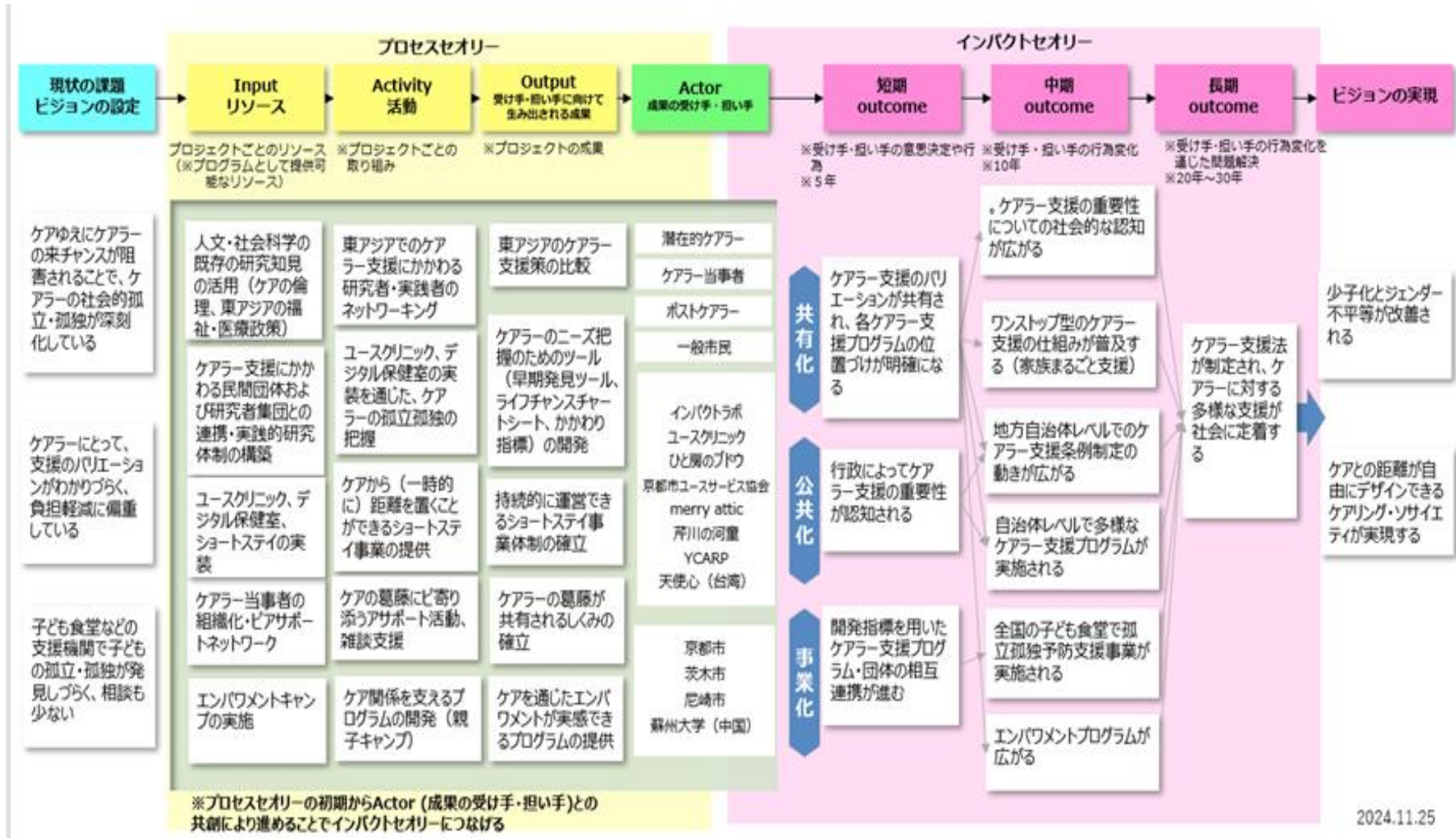
Q10. サブクエスチョン (距離化・葛藤支援チーム)

ケアから一時的に離れることを保障する仕組みとしてのショートステイ事業は、ケア関係にどのような効果があるのか？

Q11. サブクエスチョン (エンパワメントチーム)

ケア関係全体を支える活動（親子キャンプ）は、ケア関係にどのような効果があるのか？

2-3. ロジックモデル



2024.11.25

2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール

実施項目	初年度 (2024年10月 ～2025年3月)	2年度 (2025年4月～ 2026年3月)	3年度 (2026年4月～ 2027年3月)	最終年度 (2027年4月 ～2028年3月)
大項目1 基礎理論構築チーム 中項目1-1 東アジアの福祉政策 中項目1-2 指標開発	→	→	→	◆ マイルストーン② ケア・エンパワメント プラットフォーム 自治体へ紹介
大項目2 距離化・葛藤支援チーム 中項目2-1 ピアサポート事業・雑談支 援事業 中項目2-2 ショートステイ事業	→	→	◆ マイルストーン① ライフチャンス・ チャートシート 試験版	→
大項目3 ニーズ発見チーム 中項目3-1 ユースクリニック 中項目3-2 メタパース保健室 中項目3-3 中高大生食堂	→	→	→	→
大項目4 エンパワメントチーム 中項目4-1 親子キャンプ 中項目4-2 ライフチャンス支援	→	→	→	→

(2) 各実施内容

・当該年度の到達点①：東アジア地域の福祉政策におけるケアラー支援の位置づけを明らかにし、理論的な検討課題を整理する。

◎基礎理論構築グループ（リーダー：松田亮三）

1) ケアラーの社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を産まない社会像の抽出

1) -1 東アジアにおけるケアラー支援のための道程の探求：マクロレベルのケアリング・ソサイエティの理論構築

【実施内容】海外のヤングケアラー、ケアラーに関する学術文献の収集・分析

・英語圏におけるケアラー支援に関する学術文献について収集し、書誌的に整理する作業をすすめた。また、日本、韓国、については、それぞれの公用語において報告されている学術論文についての情報を収集し、検討を行った。

・韓国におけるヤングケアラーの困難な状況において分析し、在宅医療連合学会大会で発

表予定であり(2025.6.14-15)、論文執筆中である。

【実施内容】ヤングケアラー研究者・関係団体に関する情報収集とネットワーク形成

上記の作業とともに、特に、ヤングケアラーの研究をすすめている研究者ならびに関連する団体の情報について一定収集をすすめ、台湾等との研究者と連携に向けた折衝を行った。

【実施内容】ケアリング・ソサイエティに関する学術文献の収集・論点の抽出

ケアリング・ソサイエティに関する日本語圏、英語圏における先行研究を収集し、社会実装とつなげる理論化の課題をすすめた。それに関わり、ケアラー支援に関わって既存の社会政策との関わりで行われてきた議論を検討し、論点の抽出をすすめた。

【期間】2024年10月1日～2025年3月31日

【実施者】松田亮三(立命館大学・教授)・矢藤優子(立命館大学・教授)・斎藤真緒(立命館大学・教授)・日吉和子(太成学院大学・教授)・村本邦子(立命館大学・教授)・吉沅洪(立命館大学・教授)

【当該年度の主なイベント】

・2024年12月6日(金)国際シンポジウム@立命館大学朱雀キャンパス

「イギリスに学ぶ子ども・若者ケアラー支援」

ヤングケアラー研究第一人者Saul Becker氏(マンチェスターメトロポリタン大学教授)とSara Gowen氏(Sheffield Young Carers代表)を招聘したシンポジウム

主催:子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト(YCARP)

後援:立命館大学産業社会学部、こども家庭庁



・2025年3月8日(土)JST-RISTEX CAREFILキックオフイベント@オンライン

第3回日本版ヤングケアラーアクションデー「ケアラーのメンタルヘルス支援—EU Me-We Projectに学ぶ」

YCARPが2023年から開始した、子ども・若者ケアラーに関する啓発を目的とする取り組み「ヤングケアラーアクションデー」。Elisabeth Hanson教授を代表とするヨーロッパにおけるヤングケアラーのメンタルヘルスに関する調査研究チーム「Me-We Project」のメンバーより、プロジェクトで開発したメンタルヘルス支援プログラム「ME-WEモデル」について講演いただいた。

主催：CAREFILプロジェクト



・当該年度の到達点②：スペクトラム型サービスという観点から既存のケアラー支援の取り組み状況を把握し、スペクトラム型サービス提供システムの精緻化を図る。とりわけ、親支援の取り組みを把握し、これから必要となるプログラム開発の方向性を明らかにする。

◎距離化・葛藤支援グループ（リーダー：斎藤真緒（研究代表者））

2) ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段（指標等）の開発

【実施内容】ライフチャンス・チャートシート開発に向けた情報収集

ライフチャンス・チャートシート開発に向けて、参考となりそうな既存のツール（若者に親しみやすいボードゲーム等）の情報を複数収集した。子ども・若者のケアの葛藤の可視化につながる語りのパンフレット作成については、当事者とともに丁寧なコミュニケーションをとりながら進めていく必要があると明らかになったため、令和8年度以降に実施予定である。

【期間】2024年10月1日～2025年3月31日

【実施者】斎藤真緒（立命館大学・教授）・河西優（立命館大学・補助研究員）・武石卓也（立命館大学・補助研究員）

3) ケアラーの社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みくスペクトラム型支援提供プログラムの開発>

3) -2 ショートステイ事業の拡充に向けたモデル化

【実施内容】ショートステイ事業についての意見交換

こども家庭庁を訪問し、ショートステイとユースショートステイについての意見交換を行った。

【期間】2025年2月21日

【実施者】斎藤真緒（立命館大学・教授）・上田馨一（メリーアティック・代表）

【当該年度の主なイベント】

・2024年10月14日（祝）開設1周年記念 おりおりのいえ活動報告会 ユースショートステイの可能性@オンライン

主催：立命館大学

※公益財団法人京都市ユースサービス協会がユースショートステイ事業「おりおりのいえ」を運営

3) -4 ケアラーの包括的支援のためのケア・エンパワメントプラットフォーム構築

【実施内容】既存のケアラー支援の取り組み状況の調査（埼玉）

埼玉県の子供支援団体であるさいたまユースサポートネットに子ども・若者ケアラー支援の現状について、さいたまNPOセンターに埼玉県ケアラー支援条例と県内の介護者サロンの実態について、介護者サロン「オアシス」に当事者にとってのサロンの意味について、ヒアリング調査を行った。また、オンラインで埼玉県地域包括ケア課の担当者へのヒアリング調査を行った。一方、当初予定していた三重県名張市、関東の視察については年度末のスケジュールが立て込んでおり、日程調整が困難であったため、実施できなかったことから、令和7年度以降に行う予定である。

【期間】2025年2月3日～2月4日

【実施者】斎藤真緒（立命館大学・教授）・河西優（立命館大学・補助研究員）・徳竹綾香（立命館大学・大学院D1）・古谷友亮（立命館大学・大学院M1）

【対象】さいたまユースサポートネット、さいたまNPOセンター、介護者サロン「オアシス」

【期間】2025年2月27日

【実施者】斎藤真緒（立命館大学・教授）・武石卓也（立命館大学・補助研究員）・河西優（立命館大学・補助研究員）

【対象】埼玉県地域包括ケア課担当者2名

【実施内容】京都市ケアラー支援条例制定に向けた京都ケアラーネットを通じた参画協力団体である市民団体「京都ケアラーネット」を通じて、京都市ケアラー支援条例に関する議員との恒常的な意見交換や条例制定セレモニー（公開学習会）へのコミットを行った。

【期間】2024年10月1日～2025年3月31日

※2024年11月23日の「公開学習会」では日本ケアラー連盟理事の堀越栄子先生を招聘し、

条例制定へのコメントをいただいた。

【実施者】 斎藤真緒（立命館大学・教授）・河西優（立命館大学・補助研究員）

【実施内容】 国際研究チームによる既存の社会資源に関する調査

イギリスのヤングケアラー研究者・支援者(Saul Becker教授、Sara Gowen氏)とともに、日本の現場（NPO法人芹川の河童「みんなの食堂」、公益財団法人京都市ユースサービス協会「おりおりのいえ」）を視察・意見交換を行った。NPO法人芹川の河童「みんなの食堂」の視察では、こども家庭庁のヤングケアラー支援担当者より、お二人に日本の法制化について説明していただいた後、意見交換の時間をもった。

【期間】 2024年12月4日～5日

【実施者】 斎藤真緒（立命館大学・教授）・河西優（立命館大学・補助研究員）・湯谷菜王子（立命館大学・大学院D2）・武石卓也（立命館大学・補助研究員）・徳竹綾香（立命館大学・大学院D1）・亀山裕樹（北海道大学・大学院D3）・古谷友亮（立命館大学・大学院M1）



◎ニーズ発見グループ(リーダー：村本邦子)

2) ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段（指標等）の開発

【実施内容】 中高大生食堂でのアンケート

アンケートは倫理委員会申請中であり、やや遅れた。理由としては中高大生食堂を中京区から伏見区に移動させたこと、対象を子ども食堂実施団体職員にしたことである。京都ユースクリニックと中高大生食堂を連動させるためにKYOTO LAUNDRY CAFEでの実施を中止し、伏見区ユース交流センター内で月に1回実施することとした。またアンケートの対象者が未成年であることより、データ収集の壁があり、アンケート対象者を子ども食堂を運営している団体職員にしてアンケート調査を行うこととした。

【期間】 2024年10月1日～2025年3月31日

【実施者】 村本邦子（立命館大学・教授）・日吉和子（太成学院大学・教授）・山中知子（藍野大学・助教）・錦織史子（立命館大学・大学院D1）・ルオン香奈美（立命館大学・

職員)

3) ケアラーの社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みくスペクトラム型支援提供プログラムの開発>

3) -1 ケアラーの社会的孤立・孤独の早期発見

【実施内容】 ユースクリニックの実装

ユースクリニックの実装を継続し、相談者数の増加を目指しインスタの利用を行った。京都市で相談数の増加があり、相談受付人数を1名から2名に増員した。尼崎市ではユース交流センターあまポートにて、週に一回（日曜日13時～16時まで）、医療従事者（保健師・看護師・心理師）が子ども若者の相談を無料で受け付けた。尼崎市では神戸コープが尼崎市市営住宅を無償で提供してくださる申し出があり、本格的な拠点を2025年4月から置くことができ、準備を行っている。京都市でのユースクリニックは伏見区青少年活動センターにて、週に1回（16時～19時まで）、医療従事者（保健師・看護師・心理師）が子ども若者の相談を無料で受け付けた。また、2025年3月13日はインパクトラボとのコラボイベント「メタバース体験会」を京都ユースクリニックで実施し、AI技術を用いた地域での健康相談実践可能性を模索した。新たな項目として大学への出張型の京都ユースクリニックを計5回実施した（京都市立芸術大学: 2024.11.26, 12.24, 2025.1.28, 京都先端科学大学: 2024.11.17, 2025.1.21）。この実施を開始した理由は相談を待っているのではなく、こちらから若者がいる場所に向き相談受付をするというフランスの若者支援調査に基づくものである。京都市ユースサービス協会下京青少年活動センター、中京青少年活動センターが実施するYOUTH STAND（キッチンカーを利用したおやつ提供と居場所づくり）の「おやつやSUN」で京都ユースクリニックも共同して実施し、学生への簡単な生活アンケート調査や貧血予防のための知識提供を行った。

【期間】 2024年10月1日～2025年3月31日

【実施者】 日吉和子（太成学院大学・教授）、

【対象】 尼崎市ユース交流センターあまポート、伏見区青少年活動センター（京都市）、京都市立芸術大学、YOUTH STAND

【実施内容】 デジタル保健室の実装

デジタル保健室のモデル校である立命館守山中学校・高等学校において、日常的な活動の中に「デジタル保健室」の運用を組み込み、実装・活用を進めた。特に、メタバース機能を用いた仮想空間を活用することで、生徒（子ども若者）にとって新たなコミュニケーションのあり方を提示し、従来の対面型相談支援では捉えきれなかったニーズの可視化に取り組んだ。

【期間】 2024年10月1日～2025年3月31日

【実施者】 山村和恵（立命館守山中学校・高等学校養護教諭）、上田隼也（インパクトラ

ボ・代表)、戸簾隼人(滋賀大学大学院データサイエンス研究科博士前期課程)

【対象】立命館守山中学校・高等学校生 保健室利用者

【実施内容】デジタル保健室活用に向けた意識啓発と社会的検証

教職員を対象とした研修を実施し、デジタル保健室の機能、活用意義、支援対象の多様性に関する理解促進を図った。教員がデジタル空間における相談支援の特性を理解することの強化を目指した。

【実施者】山村和恵(立命館守山中学校・高等学校養護教諭)、上田隼也(インパクトラボ・代表)、戸簾隼人(滋賀大学大学院データサイエンス研究科博士前期課程)

【対象】立命館守山中学校・高等学校教員

【実施内容】Code for Japan Summit

テクノロジーを活用した市民協働型課題解決を推進する一般社団法人Code for Japanにて、デジタル保健室に関する講演を行った。本講演では、学校におけるメタバースや生成AIを用いた支援モデルとして、デジタル保健室の実装事例を紹介するとともに、対面相談が困難な生徒やヤングケアラーにとって、行政・市民・テック人材との協働による社会実装の可能性が示唆された。

【期間】2024年11月16日

【実施者】山村和恵(立命館守山中学校・高等学校養護教諭)、上田隼也(インパクトラボ・代表)、戸簾隼人(滋賀大学大学院データサイエンス研究科博士前期課程)

【対象】Code for Japan一般参加者、関係者

【実施内容】ICT夢コンテスト文部科学大臣賞 活用事例発表会

【期間】2025年2月27日

【実施者】山村和恵(立命館守山中学校・高等学校養護教諭)、上田隼也(インパクトラボ・代表)、戸簾隼人(滋賀大学大学院データサイエンス研究科博士前期課程)



【実施内容】デジタル技術を活用した孤立・孤独対策に関する自治体事例調査

先進的な子ども・若者支援やデジタル技術を活用した包括的支援に取り組む東京都渋谷

区を訪問し、視察した。現地では、自治体レベルでのデジタル活用事例や、孤立・孤独対策としてのデジタル施策の展開状況についてヒアリングを行い、今後のデジタル保健室の拡張と制度化に向けた実践的知見を得た。

【期間】2025年2月9日～2025年2月10日

【実施者】山村和恵（立命館守山中学校・高等学校養護教諭）、上田隼也（インパクトラボ・代表）、戸簾隼人（滋賀大学大学院データサイエンス研究科博士前期課程）

◎エンパワメントグループ（リーダー：吉沅洪）

2) ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段（指標等）の開発

【実施内容】日本でのケアラー・エンパワメント・キャンプ開催に向けた準備

本プロジェクトの構成を読み直しながら、これから明らかになるケアラーの援助ニーズ、ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段（指標等）もエンパワメントキャンプのプログラムに取り入れる必要があるため、ケアラー・エンパワメント・キャンプが令和6年度中に実施できなかった。

3) ケアラーの社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みくスペクトラム型支援提供プログラムの開発>

3) -3 親子プログラムの開発

【実施内容】ケアラーに関する先行研究の調査およびインタビュー調査の実施

ケアラーの社会的孤立・孤独に関する先行研究を調べた。また、ヤングケアラー支援の一環として、親子支援を実施している台湾・天使心の活動を調査、視察した。2025年3月15日（土）、吉と湯は台湾・台北で天使心（Angel Heart Family Social Welfare Foundation、<http://www.ah-h.org/>）が主催する障がい児・者および家族を支援する336チャリティーイベントに参加した。天使心創立者の林照程さん蕭雅雯さんご夫妻、顧問の頼念華先生（国立台北教育大学名誉教授）にインタビューした。天使心が行ってきた障がい児・者の家族およびきょうだいを対象とする「充電休憩キャンプ」について詳しく紹介してもらった。吉がこれまで行ってきた子育てエンパワメントキャンプのプログラムを参考に、ケアラー・エンパワメント・キャンプのプログラムを開発していく。

【期間】2024年10月1日～2025年3月31日

【実施者】吉沅洪（立命館大学・教授）・矢藤優子（立命館大学・教授）・湯詩佳（立命館大学・院生）・万珽（立命館大学・院生）

（3）成果

- ・当該年度の到達点①：東アジア地域の福祉政策におけるケアラー支援の位置づけを明ら

かにし、理論的な検討課題を整理する。

◎基礎理論構築グループ（リーダー：松田亮三）

1) ケアラーの社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を産まない社会像の抽出

1) -1 東アジアにおけるケアラー支援のための道程の探求：マクロレベルのケアリング・ソサイエティの理論構築

【実施内容】 海外のヤングケアラー、ケアラーに関する学術文献の収集・分析

成果：日本、台湾、韓国では、ケアラーの量的な把握とともに、当事者の直面する複雑な状況の把握などの検討がすすめられていっているが、現状国際誌での報告は限られており、現地語での報告を含めて検討を行うことが重要な意味をもっていることが示された。

【当該年度の主なイベント】

・2024年12月6日（金）国際シンポジウム@立命館大学朱雀キャンパス

「イギリスに学ぶ子ども・若者ケアラー支援」

ヤングケアラー研究第一人者Saul Becker氏（マンチェスターメトロポリタン大学教授）とSara Gowen氏（Sheffield Young Carers代表）を招聘したシンポジウム

主催：子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト（YCARP）

後援：立命館大学 産業社会学部、こども家庭庁

（*プロジェクトとしては、本イベントにおける討論組織等に関わり貢献した）。

・2025年3月8日（土）JST-RISTEX CAREFILキックオフイベント@オンライン

第3回日本版ヤングケアラーアクションデー「ケアラーのメンタルヘルス支援—EU Me-We Projectに学ぶ」

YCARPが2023年から開始した、子ども・若者ケアラーに関する啓発を目的とする取り組み「ヤングケアラーアクションデー」。Elisabeth Hanson教授を代表とするヨーロッパにおけるヤングケアラーのメンタルヘルスに関する調査研究チーム「Me-We Project」のメンバーより、プロジェクトで開発したメンタルヘルス支援プログラム「ME-WEモデル」について講演いただいた。

主催：CAREFILプロジェクト

【成果】

・英語圏の文献を調査したところ、東アジアにおける国際誌に掲載された論文は一定発見できたが、ヤングケアラーの研究の蓄積が大きい欧州、特に英国、オーストラリア、カナダ、米国等と比べると数量的には限られていた。

・ケアの多様性を踏まえて支援対象を細分化したプログラムという開発課題：イギリスにおいては、「ヤングケアラー」への支援だけでなく、ケアの多様性を踏まえて支援対象を細分化したプログラムが存在することが明らかになった（例：Sheffield Young Carersが実施している、依存症の親とその子どもの支援を行うM-PACTプログラム等）。日本では「ヤングケアラー」へのプログラムは行われているが、各自治体にその詳細がまかされており、ケアの多様性に応じたプログラムが開発されていない。今回のプロジェクトの協力団体である京都ケアラーネットには、外国ルーツのケアラーや精神障害者のケアラー等多様なケアに関わる団体が参画しており、それを通じたケアの多様性に応じたプログラムを検討する可能性を探るといふ洞察が得られた。

・学校における支援体制強化に向けた支援コーディネーターの可能性：イギリスにおいては、学校でのヤングケアラー支援として、専門の教員(スタッフ)の一人を「ヤングケアラーチャンピオン」として任命する取り組みが行われている。ヤングケアラーチャンピオンは、ヤングケアラーに関する知識を有し、専門的に関わることができるスタッフである。日本の学校で考えると、特別支援教育における「特別支援コーディネーター」の役割に近いと考えられる。日本においても、今後、学校でのヤングケアラー支援体制の構築を図ることが課題となるが、その際障害だけではなくすべての子ども、特に排除されやすいマイノリティの子どもたちの権利の保障、つまりすべての子どもたちの教育を受ける権利を保障していく点で、ヤングケアラーの権利をいかに保障していくかを検討していく必要がある。インクルーシブ教育においては、障害児の権利に視点が集中しやすく、ヤングケアラーの権利に関しては十分に議論されていないことは否めない。そうした状況を変えていくうえでも、「特別支援コーディネーター」に加えて、ヤングケアラーの子どもたちの権利を保障するための「ヤングケアラーチャンピオン」のようなスタッフを配置することは考慮に値する。

・メンタルヘルスの問題に対処できるプログラム構築への先進例としてのME-WEモデル：欧州では、日本で未だ十分に光が充てられていないヤングケアラーの「メンタルヘルス」に焦点化したプログラム「ME-WEモデル」が実施されてきたことが明らかになった。このモデルは、ヤングケアラー当事者とメンターからなるグループにおいて、心理学の知見に基づいたマインドフルネスなどのプログラムを通じて、ケアラー本人がネガティブな感情を相対化して困難な状況に対処していく力を培っていくものである。ME-WEモデルは子どもを対象としているが、イベントに参加した日本の当事者数名の感想からは18歳以降も長期化するメンタルヘルスの問題に対処できるプログラムや支援のニーズが示された。これまでのヤングケアラーにかかわる調査の結果を踏まえると、日本においてヤングケアラーのメンタルヘルス支援強化に向けて、こうしたプログラムを参考にすることは重要であり、今後さらに詳細を検討する必要性が示された。

・フランスのヤングケアラーに関する現地調査(2025.1.12-1.17)では、ヤングケアラーにならない支援策や対応策が行われていることが明らかになった。例えば子どもが学校を3日間休めば社会福祉士に連絡が行われ、対応が直ちに組織され不登校を防ぐとりくみが行われている。また3歳から義務教育が行われている(9時から16時半まで)ので、兄弟が下の子どもを日中に面倒をみることはほぼない。更に虐待通報ではなく心配な状況についての通報を受け付け、それを受けて家庭に調査を行い、家庭内の問題が大きくなる前に支援が行われる。その際には、子ども・若者に対する国家資格であるエジュケーターが家庭内に入り、子どもや親を含めた家族を丸ごと支援する体制を取っている。そのため現地調査では、「子どもがヤングケアラーで学校に行けないことはない」、「ヤングケアラーで学校へ行けない、自宅で勉強ができない状況である場合は子どもの人権が守られていないし、福祉が行き届いていないと解釈する」といった趣旨を、様々な支援機関での聞き取り調査では語られた。フランスのヤングケアラーにおける論文数は少なく、本当に学校を休んでいるヤングケアラーはいないのか、抜け落ちている狭間の子どもたちがいないかどうかを更に検討する必要があるが、早期から家族にかかわる支援が行われている点は評価できる。また、この支援を行ううえで国家資格であるエジュケーター(エジュケーター資格取得の学校は3年間の通学を必要とするが、そのうち2年間は実習であり、子どもに対する対応の評価は厳しく、学生の30%しか資格を取得できない)の存在は大きく、専門知識を持ちながら思いやりをもって支援にあたっているとされる。そのような専門職とその養成についても検討を深めていく課題が示された。

・当該年度の到達点②: スペクトラム型サービスという観点から既存のケアラー支援の取り組み状況を把握し、スペクトラム型サービス提供システムの精緻化を図る。とりわけ、親支援の取り組みを把握し、これから必要となるプログラム開発の方向性を明らかにする。

◎距離化・葛藤支援グループ(リーダー: 斎藤真緒(研究代表者))

2) ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段(指標等)の開発

【実施内容】 ライフチャンス・チャートシート開発に向けた情報収集

【成果】 ケアラーが自身の内面を可視化させるセルフモニタリングは、心理士等を講師とした自己分析ワークを通してピアサポートの場でも一部行われているが、当事者にとって精神的負担になる可能性がある。大阪大学が開発したリアルな大学生活を体験する

「DAIGAKU」や、Social Change Agencyが開発した「社会保障ゲーム」等のようなゲーム形式にすることで、セルフモニタリングの心理的ハードルを下げ、ケアラーの精神的負担を軽減しながらセルフモニタリングやライフイメージの描き方を提示できるのではないかと仮説を立てることができた。今後は、ケアラー本人の葛藤を可視化していくツ

ルの開発に向けて、アセスメント指標の開発では不十分である理由を言語化していくことが課題となる。

3) ケアラーの社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みくスペクトラム型支援提供プログラムの開発>

3) -2 ショートステイ事業の拡充に向けたモデル化

【実施内容】ショートステイ事業についての意見交換

こども家庭庁を訪問し、ショートステイとユースショートステイについての意見交換を行った。

【成果】病児保育との制度設計の違いが明らかになった。施設／非施設を問わないショートステイ事業全体の拡充が重要であることが明らかになった。今後は、子ども・若者シェルターとのすみわけや連携について明確化していく必要がある。

【当該年度の主なイベント】

・2024年10月14日（祝）開設1周年記念 おりおりのいえ活動報告会 ユースショートステイの可能性@オンラインを実施した。

【成果】

・35名に参加いただいたことから、子ども・若者ケアラーで未だ十分に議論されていない居住支援について社会的関心があることが明らかになった。

・利用者インタビューからは、離家できない若者ケアラーだけでなく、一人暮らしをしている若者にとって誰かと話したいというニーズがありユースショートステイを利用している実態や、スタッフや他の利用者との交流が居場所になっている一方で家族の代替にはならないという複雑な思いも明らかになった。

・今後は、利用者のニーズや実装化に向けた条件を引き続き探るとともに、居住支援のもつ意味や機能について、物理的な空間の提供というだけでなくそこで発生する関係性についても加味し、生まれ育つ「家族」にとどまらない親密圏をいかに構想できるかという議論を深めていく必要がある。

3) -4 ケアラーの包括的支援のためのケア・エンパワメントプラットフォーム構築

【実施内容】既存のケアラー支援の取り組み状況の調査（埼玉）

全国で初めてケアラー支援条例が制定された埼玉県の取り組みを調査した。さいたまユースサポートネット、さいたまセンター、介護者サロンオアシスの視察・ヒアリング調査を行った。また、オンラインで埼玉県の地域包括ケア課担当者へのヒアリング調査を行った。以下、各調査先の概要と成果である。

＊子ども・若者支援団体「さいたまユースサポートネット」

【概要】2011年に元教師であった青砥恭氏により設立された子ども・若者支援団体。地域との協働を通じた「ローカル・コモンズ」の創出を重要視している。学習支援、居場所支援、就労支援、地域づくりを行っている。2021年からはさいたま市見沼区にて教育や福祉など従来の行政の縦割りの枠組みでは解決が難しい課題を解決するために地域社会が協働するモデルづくり「堀崎プロジェクト」を始めている。

【成果】

・ターゲットをカテゴライズしないことでケアラー当事者にリーチできたり、18歳以上を対象とした若者への支援ができたりするユニバーサル型支援の強みがある一方で、ヤングケアラー支援との連携の弱さがあることが明らかになった。

・現場では「ヤングケアラー」というカテゴリーによって虐待やネグレクト等の個別の背景にある問題が不可視化されてしまう危惧があること、「ケアラー」支援条例について支援の根拠となる一方で、子ども・若者固有の課題が後景化してしまう危惧があることが語られた。

・居場所支援の意義として、「死なない程度に」日々をしのぐ方法を本人と共に考えることができる一方で、親の監護権を理由とした家族介入の困難さがあることが明らかになった。

・関係機関（児相、学校、不登校支援機関等）との連携を通じた発見・支援を行うが、情報共有の困難さがあることが明らかになった。

・ヤングケアラーコーディネーターは統括的な位置づけであり、スクールソーシャルワーカーが18歳未満の支援における実動部隊となっていることが明らかとなった。

＊中間支援団体「さいたまNPOセンター」

【概要】1999年に設立され、介護保険サポーターズクラブをはじめとする市民自治を推進してきた。2009年からケアラー支援を行い、各地にボランティアベースの団体（サロン）を市民がつくることをサポートしてきた。また、ケアラー支援団体のネットワーク化や埼玉県専門職向けセミナーも実施している。

【成果】条例制定前の市民自治の土壌が存在すること、市区レベルのケアラーズサロンの存在、担い手不足等のサロン運営の課題があることが明らかになった。

＊介護者サロン「オアシス」

【概要】2002年に介護者のためのリフレッシュバスツアーで出会ったケアラー当事者同士で結成。

【成果】

・認知症の親をもつ子どもの立場を中心とするケアラーへのピアサポートの役割を担っていることが明らかになった。主催者はサロンに対して、ケアラーが視野狭窄になっている

状況について、他者の視点を取り入れることで捉え方をかえる機会として、手抜きではなく良い介護のためにも必要であると意味づけている。

・地域資源に関する話題を通じた共感・情報交換・アドバイスなど地域に根差したサロンの強みがみられた。一方、当事者へのリーチの難しさや担い手不足と団体継続困難への不安といった課題がみられた。

*埼玉県地域包括ケア課

【概要】2020年3月に全国で初めてケアラー支援条例が制定された埼玉県の担当課。

【成果】ケア対象者に関わる関係機関や支援者への研修を通じた理解促進と人材育成といった後方支援の役割を担っていること、18歳以上の実態把握が不足していることが明らかになった。

【課題】ケアラー支援においては、行政・中間支援団体・支援団体・当事者団体といった位相が異なるアクターが存在するため、限られた期間でプラットフォーム構築を行うために調査の進めかたについて検討する必要があることが明らかになった。そのうえで、長期的には以下の点に着目する必要がある。

- ・ユニバーサル型支援とターゲット型支援（ヤングケアラー支援／ケアラー支援）とのネットワーク化や連携の実態把握
- ・移行期の繋ぎや緊急的な対応を含めた関係機関での連携・支援体制に関する実態把握
- ・支援者、当事者それぞれにとって「ケア」「ケアラー」という枠組みがどのような意味をもつのかということについての検討
- ・当事者にとっての支援への意味づけ（相談支援、ヘルパー派遣、オンラインサロン、居場所支援等）
- ・ケアラーズサロンの実態把握（参加者層、運営課題、話題の中身などの特徴も含めて）
- ・ケアラー支援条例制定後の自治体の実態把握

【実施内容】京都市ケアラー支援条例制定に向けた京都ケアラーネットを通じた参画

協力団体である市民団体「京都ケアラーネット」を通じて、京都市ケアラー支援条例に関する議員との恒常的な意見交換や条例制定セレモニー（公開学習会）へのコミットを行った。

【成果】京都ケアラーネットの活動目的としていた、京都市ケアラー支援条例が無事に制定された。今後は、引き続き参画を続け、調査を通じて京都市内のケアラーのニーズや支援団体の実態を把握することで、ケア・エンパワメントプラットフォームを構築し、具体的な施策の提言につなげることが課題である。

【実施内容】国際研究チームによる既存の社会資源に関する調査

イギリスのヤングケアラー研究者Saul Becker氏・支援者であるSheffield Young CarersのSara Gowen氏が来日し、日本のヤングケアラー支援の現場（NPO法人芹川の河童「みんなの食堂」と公益財団法人京都市ユースサービス協会「おりおりのいえ」）を視察していただき、意見交換した。

【成果】ヤングケアラーに対する居住支援が国際的に遅れていることが明らかになった。イギリスでは、ユースショートステイのような居住支援は存在しておらず、日本のユースショートステイ事業は先駆的な取り組みであることが明らかになった。

◎ニーズ発見グループ(リーダー：村本邦子)

2) ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段（指標等）の開発

【実施内容】中高大生食堂でのアンケート

【成果】子ども食堂を運営している団体に許可を得て現在は倫理委員会申請中であり、来年度に実施予定である。

3) ケアラーの社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みくスペクトラム型支援提供プログラムの開発>

3) -1 ケアラーの社会的孤立・孤独の早期発見

【実施内容】ユースクリニックの実装

【成果】ユースクリニック：尼崎市、京都市の両市を合わせて約100名の相談者があった。ヤングケアラーに関してはユースクリニックでの相談者ではなく、子ども食堂の方が出会えることが分かり、今後の子ども食堂における指標開発が重要と再認識した。尼崎市では神戸コープが尼崎市市営住宅を無償で提供してくださる申し出があり、ユースクリニックの拠点を2025年4月から置くことが決定した。尼崎市では今後、場所として安定した相談事業を行うことができると考えており、更に周知を広げていく必要がある。また大学構内へ入り、ユースワーカーが行う居場所づくりにユースクリニックが共同で行うことで、学生（若者）とより近づくことができた。日常生活の簡単なアンケートや貧血に関する知識提供により、学生への健康意識の向上に繋げると共にユースクリニックの周知に繋がった。また、2025年3月13日はインパクトラボとのコラボイベント「メタバース体験会」を京都ユースクリニックで実施し、AI技術を用いた地域での健康相談実践可能性を模索した。参加した若者から、「目の前に広がる仮想空間に圧倒された」「手を動かすとアバターも同じように動いて、不思議な感覚だった」「普段のビデオ通話とは全然違う没入感があった」「顔を出さずにアバターを介して会話できるので、相談がしやすそう」などの感想がきかれ、メタバースを利用した地域での相談実施の効果の可能性があることが分かった。

【実施内容】デジタル保健室の実装

デジタル保健室のモデル校である立命館守山中学校・高等学校において、日常的な活動の中に「デジタル保健室」の運用を組み込み、実装・活用を進めた。

【成果】 デジタル保健室という非対面・匿名性の高い空間が、心理的抵抗を下げる効果をもち、葛藤支援ツールの介入チャネルとして機能する可能性を示唆できた。課題として、単なるツール開発だけでは不十分であり、ツール使用後のフォローアップ体制（ピアサポート、専門職支援の必要性などの検討も含む）も充実させる必要がある。

【実施内容】 デジタル保健室活用に向けた意識啓発と社会的検証

教職員を対象とした研修において生徒、保護者、地域住民を対象としたデジタル保健室の公開実証実験、また市民向けの講演会も実施した。

【成果】 広範な層からフィードバックを得るとともに、学校外部における認知促進と社会実装への手がかりを得た。また自治体職員、民間エンジニア、教育関係者から「教育現場におけるデジタルと福祉の交差領域」に対する関心が高まり、特に子ども・若者支援をめぐる行政データ活用や、相談支援の設計に関する具体的な意見交換が行われた。これらの活動は社会の関心も高く、新聞をはじめとするメディアの掲載も多数あった。またデジタル保健室はICT夢コンテストで文部科学大臣賞も受賞した (<https://www.japet.or.jp/ict-yume-con/award-2024/>)。課題として、社会実装を見据えた場合、学校現場のみならず、地域支援機関、医療・福祉機関との接続可能性も継続して検討していくことが求められる。

【実施内容】 デジタル技術を活用した孤立・孤独対策に関する自治体事例調査

先進的な子ども・若者支援やデジタル技術を活用した包括的支援に取り組む東京都渋谷区を訪問し、視察を実施した。

【成果】 先進的な子ども・若者支援施策、及びデジタル技術を活用した孤立・孤独対策の展開状況について実地調査を行った。またICT活用による包括的支援モデルに関する実践的知見を取得し、デジタル保健室拡張に向けた具体的方向性を得た。課題として、ツール開発にあたり、ケアラー当事者との協働によるプロトタイピングを重ね、心理的安全性を確保したフィードバックサイクルを設ける必要がある。

◎エンパワメントグループ（リーダー：吉沅洪）

2) ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段（指標等）の開発

【実施内容】 日本でのケアラー・エンパワメント・キャンプ開催に向けた準備

【成果】 本プロジェクトの構成を読み直しながら、これから明らかになるケアラーの援助ニーズ、ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段（指標等）もエンパワメントキャンプのプログラムに取り入れる必要があるため、ケアラー・エンパワメン

ト・キャンプが令和6年度中に実施できなかった。エンパワメントグループに新しいメンバーを2名追加したので、今後の研究活動が加速していくことが期待される。

3) ケアラーの社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みくスペクトラム型支援提供プログラムの開発>

3) -3 親子プログラムの開発

【実施内容】 ケアラーに関する先行研究の調査およびインタビュー調査の実施

【成果】 ケアラーの社会的孤立・孤独に関する先行研究を調べていく中で、家族主義や、福祉政策などが複雑に絡みあっていることが分かった。本プロジェクトの構成を読み直しながら、これから明らかになるケアラーの援助ニーズ、ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手段（指標等）もエンパワメントキャンプのプログラムに取り入れる必要があると認識した。

・2025年3月15日（土）、吉と湯は台湾・台北で天使心（Angel Heart Family Social Welfare Foundation、<http://www.ah-h.org/>）が主催する障がい児・者および家族を支援する336（毎年3月第3土曜日で開催しているため、336という名称になった）チャリティーイベントに参加した。天使心創作者の林照程さん、顧問の頼念華さんにインタビューした。天使心が行ってきた障がい児・者の家族およびきょうだいを対象とする「充電休憩キャンプ」についてインタビュー調査を行った。日本において、障がい児・者のきょうだいがケアラーの役割を担っていることが多いが、家族という視点からきょうだいへの支援は日本が大変遅れていることが明らかになった。

（4）プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. メインクエスチョン① 社会的孤立・孤独のメカニズム理解

日本におけるケアラーの社会的孤立・孤独の特徴は何か？

先駆的にケアラー支援に着手している自治体・団体ヒアリングを通じて、ヤングケアラーの法制化とは対照的に、全世代の多様なケアラーの実態について、量的把握も圧倒的に遅れていることが明らかになった。そもそも、ケアラーという自覚もなく、支援団体を中心とする社会との接点をもたえていないケアラーが多数存在することが推測された。イギリスやフランスなどの仕組みを参照しながら、ケアラーの孤立・孤独の早期発見にかかわる指標開発（Q5）だけではなく、自治体レベルでのケアラー支援条例制定の取り組みや、法制化にかかわる研究・社会実践活動の活性化に、本プロジェクトの研究成果を積極的に還元していく必要がある。

Q2. メインクエスチョン② 社会的孤立・孤独を生まない社会像の抽出

ケアの社会的価値が根付く”ケアリング・ソサイエティ”の実現において、ケアラー支援はどのような意味をもつのか？

国際シンポジウム等の実施を通じて、欧米での「ケアの倫理」を中心とする”ケアリング・ソサエティ”に関する研究の進展およびこうした視点からの政策分析・支援の具体化との対比において、日本を含む東アジアでは、まだ”ケアリング・ソサエティ”に関する議論が、実際の政策と連動する形で十分展開されていないことが明らかになった。今後、東アジアでの研究および社会実践にかかわるネットワークを構築し、ケアに関する研究動向およびケアラー支援の取り組みについて把握する必要がある。

Q3. メインクエスチョン③ 社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み

ケアラーの生活・人生においてライフチャンスの実現はいかにして可能か？

ケアラー団体の視察等を通じて、多くのケアラーが家族へのケアを自明視しており、ライフチャンスの断念が常態化しており、ライフチャンスを自覚化するには時間をかけた取り組みが必要であることが明らかになった。こうした視点をツール開発に生かしていくと同時に (Q6)、ケアとの距離をデザインしやすい支援プログラムの社会実装にかかわる課題を明らかにし、多くのケアラーが利用可能な仕組みを定着させる必要がある

(Q10,Q11)。潜在的なケアラーを含め、多くの子ども・若者が情報に接することができる対面・非対面での居場所（ユースクリニック、子ども食堂、デジタル保健室）の活性化を通じてケアにかかわる情報へのアクセシビリティを高めていく必要がある (Q7,Q8)。

Q4. サブクエスチョン (理論構築チーム)

家族主義が根強い東アジア地域において、ケアラー支援の障壁はどのようなものか？ケアラー支援がどのようにして可能になるか？

国際ジャーナルにおける東アジア地域でのケアラー支援の研究動向とその到達点をおおよそ把握することができた。ただし、各国での言語をもちいたジャーナルの検討およびアジア地域におけるケアラー支援の実態把握までには至っていない。2025年度以降、各地域での取り組み状況を把握し、家族主義的福祉政策とのかかわりの中で、ケアラー支援の現状や障壁等を把握し、アジアでのケアラー支援の道程を探求する。

Q5. サブクエスチョン (指標開発チーム)

ケアラーが社会的孤立・孤独に陥るリスクはどのように可視化し評価することができるか？

調査協力の依頼に時間を要したため、現在倫理審査申請中である。審査承認後、調査に着手し、指標開発を行う予定である。

Q6. サブクエスチョン (指標開発チーム)

ケアラーが自らのライフチャンスを意識化するためには、どのようなツールが有効か？

家族ケア規範が強い日本では、多くのケアラーがライフチャンスを断念している現状があり、ワンショット型のアセスメントでは、ケアにかかわる葛藤に向き合い、自分自身のライフチャンスを考えようとする意欲を育むことは難しいことが明らかになった。本プロジェクトでは、ヤングケアラー支援で普及しているワンショット型のアセスメント方式ではなく、葛藤に向き合い自分自身のライフチャンスをじっくり考えるためのツール開発が

重要であるという考えに至った。とりわけ、ヤングケアラー・若者ケアラーが負担なく取り組みやすいようなツールとして、〈ゲーム〉という媒体に注目した。来年度以降、既存のゲームの特徴や課題を整理しつつ、〈ゲーム〉という媒体で、ライフチャンスを意識化するツール開発に取り組む。

Q7. サブクエスション (ニーズ発見チーム)

ヤングケアラーの早期把握の場所として、対面での活動 (ユースクリニック) はどのような効果があるのか?

複数の自治体でユースクリニックの実装を進めることができ、ケアに関する情報にアクセスできる環境が広がりつつある。ケアラーの社会的孤立・孤独把握の指標開発およびゲームの開発と並行して、こうした研究成果の還元場所として、来年度以降ユースクリニックを活用していく予定である。

Q8. サブクエスション (ニーズ発見チーム)

ヤングケアラーの早期把握の場所として、非対面の居場所と活動 (デジタル保健室) はどのような効果があるのか?

デジタル保健室が文部科学大臣賞を受賞したことに示されているように、非対面で匿名性の高いツールは、ケアラー支援のみならず、教育業界全般において需要が高くなっている。対面ではアクセスしづらい子ども・若者への新しいアウトリーチ手法として、デジタル保健室の可能性は高く評価できる。同時に、ツール使用後のフォローアップ体制 (ピアサポート、専門職からの支援)、対面支援との連動やその動線についても、デジタル保健室を通じて丁寧に検証していく必要がある。

Q9. サブクエスション (距離化・葛藤支援チーム)

ケアラーはどのような葛藤を抱えているのか?

ツール開発 (Q6) の前提となる研究調査課題として、ケアラーの葛藤理解がある。本年度の調査では、既存の研究や支援は、「目に見えやすい/発見しやすい/わかりやすい」ケアラーが対象となっているが、潜在的なケアラーやポストケアラーなど、ケアラーの葛藤は広範囲にわたることが推測される。本プロジェクトでは、こうした既存の研究・支援の課題を刷新し、ケアラー支援の枠組みの構築につなげる。

Q10. サブクエスション (距離化・葛藤支援チーム)

ケアから一時的に離れることを保障する仕組みとしてのショートステイ事業は、ケア関係にどのような効果があるのか?

こども家庭庁訪問を通じて、国の事業としてのショートステイ事業の運営上の課題を共有することができた。国の事業として拡充させるためには、ショートステイ事業の効果にかかわるエビデンスを示す必要がある。来年度以降は、ショートステイ事業、ユースショートステイ事業の利用者調査を通じて、この事業の効果を明らかにする。

Q11. サブクエスション (エンパワメントチーム)

ケア関係全体を支える活動 (親子キャンプ) は、ケア関係にどのような効果があるのか?

今年度は、予備調査にとどまっている。ケアラーへの包括的支援システムの構築のためには、ケアから（一次的に）離れることができる選択肢が十分保障されていない中で、ケア関係を継続する選択（ケアを通じたエンパワメント）を支援することは、ケアの家族責任を強化しかねないため、プログラムの設計は慎重に行う必要がある点をプロジェクト全体で確認した。東アジアでの”ケアリング・ソサエティ”の実現にかかわる研究と連動させて（Q2）、プログラムのあり方を来年度以降検討していく。

（5）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

・本年度は、日本における先駆的なケアラー支援の取り組みに関する情報収集を行い、ケアラー支援の現状把握に注力した。ケアラーのアクセシビリティを高めるためのユースクリニックやデジタル保健室については、社会的反響も大きく、実装化に向けた見通しが予定よりも早まる可能性がある。他方で、ケアラー支援としてのショートステイ事業は、国の方針としても現状では拡充が見込めず、精緻なエビデンスが必要であることが明らかになった。ショートステイ事業を含めて、ケアから離れる選択肢が十分保障されないまま、ケアを通じたエンパワメントを推し進めることは、家族責任を強化しかねないため、エンパワメントプログラムは慎重に進めることとした。

・プロジェクト全体での取り組みを通じて、イギリスやフランスでは、「ケアの倫理」にかかわる議論が学術研究だけではなく社会政策にも反映されつつあるが、東アジアではケアの家族責任をケアラー自身が強く内面化しており、自分自身のライフチャンスを断念することを自明視しているために、ワンショット型のアセスメントだけでは、ケアラーの葛藤に丁寧寄り添い支援につなげることは容易ではないことも明らかになった。

・家族主義的福祉政策が主軸となっているアジアの他の地域におけるケアラー支援に関する研究および支援活動を調査し、東アジアにおける「ケアリング・ソサエティ」実現に向けた障壁を明らかにし、その中で、ケアラー支援をどのように位置づけられるか、検討する。また、日本での包括的なケアラー支援システムの構築に向けて、社会実装・事業拡充につながるエビデンスが重要になることが明らかになったので、ショートステイ事業等での利用者調査を進める。とりわけヤングケアラー・若者ケアラーが、自らのライフチャンスを考えられるようなツールとして、〈ゲーム〉という媒体を活用した開発に取り組む。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2024年10月24日	CAREFIL 第1回全体会議	オンライン (zoom)	顔合わせ、11月25日東京での全体会議について、令和6年度事業実施状況の共有、令和7年度以降の事業の進め方について、事務連絡

2025年1月8日	CAREFIL第2回全体会議	オンライン (zoom)	1月21日戦略会議に向けた進捗共有、令和7年度計画書作成について、キックオフイベントについて、事務連絡
2024年10月31日	ニーズ発見チーム	伏見青少年活動センター (京都ユースクリニック見学)	一般社団法人インパクトラボが伏見青少年活動センターで行われている京都ユースクリニックを見学し、伏見青少年活動センターと京都ユースクリニックのスタッフと共に会議を行った。今後のAI利用の可能性を話し合い、今年度中に伏見青少年活動センターで京都ユースクリニックの時にバーチャルユースクリニックをテスト的に行うこととし、伏見青少年活動センターの許可を得た。
2024年3月15日	ニーズ発見チーム	オンライン (zoom)	全国こども食堂支援センター・むすびえさんと、将来的に子ども食堂で実施する孤立孤独指標についての可能性と広報について会議を行った。一般社団法人インパクトラボ、京都ユースクリニックのスタッフが参加した。

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

ショートステイ事業について、こども家庭庁との意見交換を通じて、病児保育との制度設計の違い、施設／非施設を問わないショートステイ事業全体の拡充が重要であることが明らかになった。今後は、ショートステイ事業の実装化に向けてエビデンスを蓄積するとともに、子ども・若者シェルターとのすみわけや連携について明確化することが課題となる。

4. 研究開発実施体制

(1) 基礎理論構築グループ (リーダー：松田亮三 立命館大学、教授)

・実施項目：東アジアの家族主義的福祉政策におけるケアラー支援の位置づけ
本グループではプロジェクトの理論構築を担当する。日本のケアラー支援にかかわる団体や自治体の動向調査や、多様なケアラー支援を実施している団体とのネットワーク化に向

けたオープンミーティングの開催を定期開催し、スペクトラム型支援サービスの領域設定の精緻化を測る。東アジアの家族主義的福祉政策の中でどのように位置づけるのかを検討し、ケア・エンパワメントプラットフォームの構築に向けた中核的役割を担う。また国際シンポジウム開催を通じて、本プロジェクトの社会への発信機能も担う。

・実施項目：指標開発

ニーズ発見グループの「孤立・孤独指標」の開発、葛藤支援・距離化支援の「ライフチャンス・チャートシート」の開発、エンパワメントグループで用いる動的家族画による「家族力動アセスメント」および「かかわり指標 (Interaction Rating Scale ; 安梅, 矢藤ら, 2007)」の実施状況について、適宜進捗状況を把握し、スペクトラム型支援サービスの中でそれぞれの指標の活用方法を検証すると同時に、ケア・エンパワメントプラットフォームの中にそれぞれの指標を配置し、効果的なケアラー支援の構築を目指す。

(2) 距離化・葛藤支援グループ (リーダー：斎藤真緒(研究代表者) 立命館大学、教授)

立命館大学産業社会学部

・実施項目：スペクトラム型ケアラー支援におけるケアとの距離化を可視化させる

グループの役割：スペクトラム型ケアラー支援における<ケアからの距離化>と<葛藤支援>にかかわる指標開発と実装化を行う。

(3) ニーズ発見グループ (リーダー：村本邦子 立命館大学、教授)

立命館大学大学院人間科学研究科

・実施項目：

- 1 ユースクリニックによる子ども若者のニーズ発見
- 2 メタバース保健室による子ども若者のニーズ発見
- 3 中高大生カフェに子ども若者のニーズ発見

グループの役割：ユースクリニック、デジタル保健室、中高大生食堂と子ども若者に直接関わる

実装グループとして、健康相談時に子ども若者におけるニーズを抽出しつつ、1 理論構築グループ、2距離化・葛藤支援グループにより作成された評価指標を用いて孤立孤独の評価を行い、実装現場での孤立孤独の早期予防介入を目指す。特に健康関連ニーズを抽出できることが特徴であり、距離化・葛藤支援グループと連携してヤングケアラーの健康に関しても介入する。

(4) エンパワメントグループ (リーダー：吉沅洪 立命館大学、教授)

・実施項目：親子キャンプ、ライフチャンス形成支援 (新規)

グループの役割：ケアの負担軽減を中心とする狭義のケアラー支援だけではなく、ケアと

両立した自己実現を含むライフチャンスの拡充をはかるためのプログラムおよび指標として、かかわり指標を改良する。

5. 研究開発実施者

基礎理論構築グループ（リーダー氏名：松田亮三）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
松田亮三	マツダ リョウゾウ	立命館大学	産業社会学部	教授
矢藤優子	ヤトウ ユウコ	立命館大学	総合心理学部	教授
斎藤真緒	サイトウ マオ	立命館大学	産業社会学部	教授
日吉和子	ヒヨシ カズコ	太成学院大学	看護学部	教授
村本邦子	ムラモト クニコ	立命館大学	大学院人間科学研究科	教授
吉沅洪	キツ ゲンコウ	立命館大学	大学院人間科学研究科	教授

距離化・葛藤支援グループ（リーダー氏名：斎藤真緒）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
斎藤 真緒	サイトウ マオ	立命館大学	産業社会学部	教授
村本 邦子	ムラモト クニコ	立命館大学	大学院人間科学研究科	教授
川崎 敦子	カワサキ アツコ	NPO法人芹川の河童		代表
上田 馨一	ウエダ カイチ	merry attic		代表
野池 雅人	ノイケ マサト	merry attic		アドバイザー
竹田 明子	タケダ アキコ	京都市ユースサービス協会		ケア事業担当 統括
河西 優	カサイ ユウ	立命館大学	衣笠総合研究機構	補助研究員
武石 卓也	タケイシ タクヤ	立命館大学	衣笠総合研究機構	補助研究員
湯谷 菜王子	ユタニ ナオコ	立命館大学	大学院社会学研究科	D2
徳竹 綾香	トクタケ アヤカ	立命館大学	大学院社会学研究科	D1

亀山 裕樹	カメヤマ ユウキ	北海道大学	教育学院	D3
古谷 友亮	フルヤ ユウスケ	立命館大学	大学院社会学研究科	M1

ニーズ発見グループ (リーダー氏名：日吉和子)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
村本 邦子	ムラモト クニコ	立命館大学	大学院人間科学研究科	教授
日吉 和子	ヒヨシ カズコ	太成学院大学	看護学部	教授
山村 和恵	ヤマムラ カズエ	立命館守山中学校・ 高等学校		養護教諭
上田 隼也	ウエダ ジュンヤ	一般社団法人インパ クトラボ		代表理事
山中 知子	ヤマナカ トモコ	藍野大学	医療保健学部看護学科	助教
錦織 史子	ニシキオリ フミコ	立命館大学	大学院人間科学研究科	D1
ドブソン (近森) 栄子	ドブソン チカモリ エイコ	四条畷学園大学	看護学部	非常勤講師
ルオン 香奈美	ルオン カナミ	立命館大学 (予定)	衣笠総合研究機構	非常勤講師
戸簾 隼人	トミス ハヤト	滋賀大学	データサイエンス研究科	M2
上田 拓実	ウエダ タクミ	九州大学	大学院工学府	M1
橘 久美子	タチバナ クミコ	シェフきつず京都		非常勤職員
新屋 茜	シンヤ アカネ	太成学院大学	看護学部	非常勤職員
石塚 芽依	イシヅカ メイ	神戸松蔭大学	こころのケア・ センター	非常勤職員
宇野 明香	ウノ アスカ	NPO法人happiness.		非常勤職員
横山 詞果	ヨコヤマ フミカ	太成学院大学	看護学部	非常勤職員

エンパワメントグループ (リーダー氏名：吉沅洪)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
吉 沅洪	キツ ゲンコウ	立命館大学	大学院人間科学研究科	教授
矢藤 優子	ヤトウ ユウコ	立命館大学	総合心理学部	教授

川崎 敦子	カワサキ アツコ	NPO法人芹川の河童		代表
齋藤 真緒	サイトウ マオ	立命館大学	産業社会学部	教授
CHEN Tingting	チェン ティンティン	立命館大学	大学院人間科学研究科	D
TANG Shijia	タン シージア	立命館大学	大学院人間科学研究科	D
WAN Ting	ワン ティン	立命館大学	大学院人間科学研究科	D

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2025年 3月8日	JST-RISTEX CAREFILキックオフ イベント第3回日本版 ヤングケアラーアクシ ョンデー ケアラーの メンタルヘルス支援 —EU Me-We Projectの 取り組み	CAREF ILプロ ジェク ト	オンラ イン (zoom)	46名 (学 生・ケア ラー当事 者7名、 一般39 名)	ヨーロッパでケアラーのメンタルヘルスについて取り組む研究チーム「ME-WEプロジェクト」のメンバーより、ME-WEプロジェクトの取り組みについてお話いただいた。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (2件)

●国内誌 (2件)

- ・山中知子、錦織史子、横山詞果、日吉和子、「ユースクリニックと公式 LINE の連携による子ども・若者の健康支援」、日本ヘルスコミュニケーション学会誌、in press.
- ・山中知子、日吉和子、「路上に彷徨う若者への支援～若者が路上にいる要因についての文献検討～」、藍野大学紀要、in press.

●国際誌 (0件)

(2) 査読なし (0件)

6-4. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)

- (1) 招待講演(国内会議 0件、国際会議 0件)
- (2) 口頭発表(国内会議 3件、国際会議 1件)
- ・上田 拓実、戸簾 隼人、上田 隼也、山村 和恵、山中 司、「子供・若者ケアラー支援におけるデジタルデバйд解消のためのAIカメラ活用型文通支援システム」、第87回情報処理学会全国大会講演論文集、立命館大学OIC、2025年3月、pp.4-939-4-940.
 - ・戸簾 隼人、上田 拓実、上田 隼也、山村 和恵、山中 司、「子供・若者ケアラー支援における初期接点確保のためのユースクリニックデジタルツイン」、第87回情報処理学会全国大会講演論文集、立命館大学OIC、2025年3月、pp.4-941-4-942.
 - ・日吉和子、錦織史子、山中知子、「あまがさきユース保健室で子ども若者の命と健康を守るには～フランスのユースクリニックを基に～」、第44回日本看護科学学会学術集会、2024年12月7日、熊本.
 - ・Matsuda, R. and Saito, M. "Awareness and policy responses to 'young carers' in Japan: changes in the last decade" International Postgraduate and Academic Conference 2025, 13-14 Feb 2025, National Taipei University, Taipei. Oral Presentation.
- (3) ポスター発表(国内会議 1件、国際会議 1件)
- ・Tomoko Yamanaka, Fumiko Nishikiori, Kazuko Hiyoshi. Receiving SOS via Official LINE: A New Approach to Child Abuse Response at Youth Clinics. International conference of International Society for Prevention of Child Abuse and Neglect, (on Accept)
 - ・山中知子、朴幸洙、日吉和子. 韓国のヤングケアラーに関する文献検討～ユースクリニックの可能性～. 日本在宅医療連合大会. (on Accept)

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

- (1) 新聞報道・投稿 (0件)
- (2) 受賞 (1件)
- ・2024年度教育DX推進フォーラム、2025年2月27日、ICT夢コンテスト文部科学大臣賞受賞、「メタバースや生成AIを活用して、新たな対話の場を創る『デジタル保健室』」事例発表、国立オリンピック記念青少年総合センター。
https://note.com/impactlab/n/n1eaa5c230926?sub_rt=share_pb
- (3) その他 (30件)
- ・斎藤真緒、茨木市主任児童委員部会・児童福祉部会合同研修会、ヤングケアラーの方々とどう関わっていくのか、2024年10月9日
 - ・斎藤真緒、令和6年度大津市ヤングケアラー研修会、子ども・若者ケアラーの現状と課題について、2024年10月24日
 - ・斎藤真緒、令和6年度綾部市要対協児童虐待防止研修会、多機関多職種によるヤングケアラー支援、2024年10月28日

- ・ 斎藤真緒、令和6年度横浜市地域ケアプラザコーディネーター共通研修応用編 第1回 子ども・若者の育ちと自立を支える 地域づくりを探る、2024年11月6日
- ・ 斎藤真緒、令和6年度福知山市要対協 児童虐待防止研修会、地域で子どもと家族を支えるために 私たちができることとは？、2024年11月11日
- ・ 斎藤真緒、長岡京市男女共同参画センターPurple & Orange Ribbon Project 2024、ヤングケアラーを知っていますか？現状と支援の課題、2024年11月12日
- ・ 斎藤真緒、21世紀を生きる松原の子どもたちの未来を考える集い、ヤングケアラーを知っていますか？ 地域全体で支えるために、2024年11月16日
- ・ 斎藤真緒、奈良民医連 ケアマネ小委員会学習会 ヤングケアラー支援について、2024年11月20日
- ・ 斎藤真緒・上田馨一、滋賀県子どもたちの“今”を知る公開講座、子どもの生きづらさと家族まるごと支援、2024年11月25日
- ・ 斎藤真緒、福岡市研修会 ヤングケアラー支援について 2024年11月27日
- ・ 斎藤真緒、京都市令和6年度人権月間講座こどもまんなか社会の実現に向けて ～ヤングケアラーへの理解と支援～、2024年12月4日
- ・ 斎藤真緒、神戸市北神区役所高齢者虐待防止研修会 高齢者虐待と対応について 介護者（ケアラー）の立場に立った支援を考える、2024年12月11日
- ・ 斎藤真緒、東大阪市イコーラムカレッジ 男性限定「キラッ！と講座」2 介護に備えよう！ 逃げられない「家族の介護」その時あなたは...、2024年12月21日
- ・ 斎藤真緒、大阪府令和6年度小・中学校人権教育研修、ヤングケアラーが抱える課題について—家族のケアを担う子どもの実情—、2024年12月23日
- ・ 斎藤真緒、東大阪市ヤングケアラー関係機関職員等研修【基礎研修】 ヤングケアラーを知っていますか？ 現状と支援の課題、2025年1月7日
- ・ 斎藤真緒、京都市教育委員会令和6年度ヤングケアラー等支援関係者研修会 ヤングケアラー支援をめぐる課題、2025年1月20日収録（動画配信）
- ・ 斎藤真緒、東大阪市ヤングケアラー関係機関職員等研修【応用編】、2025年1月22・23日
- ・ 斎藤真緒、NPO法人ファミリレ社会課題を考える対話会 ケアラー支援 2025年1月25日
- ・ 斎藤真緒、京都府介護支援専門員会企画研修 ヤングケアラー支援について 2025年1月27日
- ・ 斎藤真緒、京都府八幡市研修会 ヤングケアラーを知っていますか？ 現状と支援の課題、2025年1月28日
- ・ 斎藤真緒、令和6年度 岡山県ヤングケアラー支援者研修 ヤングケアラーへの理解と支援のあり方について ～多機関連携の視点から～、2025年2月6日
- ・ 斎藤真緒、大阪府人権総合講座 ヤングケアラーについて 2025年2月7日
- ・ 斎藤真緒、大津市社会福祉事業団ヘルパー合同研修 ヤングケアラーを知ること 支えるということ、2025年2月12日
- ・ 斎藤真緒、久留米市令和6年度ヤングケアラー支援に関わる支援機関等研修会、ヤングケアラー支援に必要な視点、2025年2月14日
- ・ 斎藤真緒、東京都港区2024年度リーブラ主催講座、ケアする男たち —男性ケアラーの現在地—、2025年3月4日
- ・ 日吉和子、子どもの命を守るユースクリニック、松戸市市議会学習会、2025年2月5日、千葉県。
- ・ 日吉和子、子どもの命を守るユースクリニック、柏市市議会学習会、2025年2月5日、千葉県。
- ・ 日吉和子、若者支援から学ぶ『困難を抱えた女性』へのエンパワーメント、『ユース保健室』若者の相談窓口・ユースクリニックについて、ウィメンズカウンセリン

グ京都、2025年2月16日、京都。

- ・日吉和子. 若者の相談窓口～ユースクリニック国内外の取り組み～, 性暴力被害者の複合的なニーズに基づく途切れない包括的支援. NPO法人性暴力被害者支援センター・ひょうご. 2024年12月8日、兵庫.
- ・BS朝日、2025年3月13日、「最新鋭の保健室」『つながる絵本 for SDGs』
<https://www.bs-asahi.co.jp/tunagaruehon/>

6-6. 知財出願

- (1) 国内出願 (0件)
- (2) 海外出願 (0件)